

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 胡田 裕教

論 文 題 目

高等学校普通科におけるキャリア教育のカリキュラムに関する研究
—他者や社会を通じた学びが自己に返る原理の追究—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	柴田好章
委 員	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	渡邊雅子
委 員	名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授	坂本將暢

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本研究は、高等学校におけるキャリア教育のカリキュラム構成論の必要性を明らかにした上で、高等学校普通科における総合的な学習（探究）の時間で行われる他者、社会を通したキャリア教育の実践と理論を検討し、それらを踏まえてキャリア教育のカリキュラム構成論を提案している。そのために、高等学校におけるキャリア教育の動向について明らかにし、キャリア教育の課題を指摘した上で、高等学校普通科である研究協力校2校の授業観察に基づいた実践の分析と理論的な考察を通して、他者や社会を通した学びが自己に戻る原理を追究している。

キャリア教育には、あいまいな概念や未分化な概念が含まれ、多様性や境界の曖昧さゆえ、その概念の全体像を捉えることは簡単なことではない。キャリア教育と銘打ったカリキュラムはたくさん存在するが、そのカリキュラムの構成論が形成されていない。一方、キャリア教育実践では、一見すると自分に直接関わりがない事象であっても、それが振り返って自分の生き方につながることを期待して展開されている取り組みもある。そうした実践がキャリア教育になりうるのであるのなら、キャリア教育とは認識しづらい学習をあえて対象化し、そこに潜在するキャリア教育の意義や本質を明らかにする必要がある。そこで、他者の生き方や社会問題を通したキャリア教育に着目し、高等学校普通科における総合的な学習（探究）の時間で行われる他者、社会を通したキャリア教育の実践と理論を検討し、キャリア教育のカリキュラム構成論を提案することを、本研究の中心課題に設定している。

第1章では、高等学校におけるキャリア教育の動向（政策、実践、研究）を振り返り、高等学校の授業で行われているキャリア教育実践に内在する研究課題をカリキュラム研究の視点から明らかにしている。多様なキャリア教育の実践を体系化するための、キャリア教育のカリキュラムの構成論を形成することが研究の課題であることを指摘している。

第2章では、キャリア教育の理論と実践をつなぐカリキュラム構成論として、多様なキャリア教育の構造を仮説的に提示している。その構造のうち本研究では、「他者を通したキャリア教育」と「社会を通したキャリア教育」に注目し、他者や社会の問題を「自分事」として捉えることによって、もう一度自分に返ってくるということが可能であり、そこにキャリア教育としての要件があることを提示している。そして、「自分事」の成立要素として、仮説として、「当事者性」「主体性」「切実性」を手掛かりとして提示し、理論的・仮説的モデルを提示している。

第3章では、他者を通したキャリア教育の実践を分析しながら、キャリア教育における他者の意味を理論的に考察している。高等学校普通科の総合的な学習の時間において行われた卒業生である社会人による講話を聞いた生徒たちの記述から探索的な分

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

析している。その上で、「学習者—学習者が出会う他者」の関係だけでなく、「教師—学習者」の関係も含めた教育における他者と主体との関係を広範に論じている。特に、「学習者—学習者が出会う他者」の関係では、鯨岡（2006）が示した「相互主体性」概念を手がかりにしてキャリア教育の可能性を導いている。そして、《「他者との関わり」で築くキャリア教育の効果を高めるためのカリキュラムデザインの方策》として、(1) 自分事として捉えることができる「人との出会い」を取り入れたカリキュラムデザインの方策、(2) 支配・被支配の関係に陥らないためのカリキュラムデザインの方策を導いている。

第4章では、社会を通したキャリア教育の実践を分析しながら、キャリア教育における社会問題の解決の意味を理論的に考察している。キャリア教育に焦点を当てた高等学校普通科の総合的な学習の時間における防災教育の実践を分析している。防災教育をキャリア教育に位置づける場合、他人事ではなく自分事として防災の問題を捉えていく点に、キャリア教育の潜在的な可能性があることを明らかにしている。その上で、「当事者性」「主体性」「切実性」に関わる理論的検討を通して、社会との関わりの中で、自己の在り方生き方を考えることがキャリア教育につながることを示している。そして、《「社会との関わり」で築くキャリア教育の効果を高めるためのカリキュラムデザインの方策》として、(1) 社会における問題を自分事として捉えるためのカリキュラムデザインの方策、(2) あえて虚構的な問題設定を取り入れるカリキュラムデザインの方策を導いている。

以上のように、本研究全体を通して、「当事者性」「主体性」「切実性」を踏まえることによって、他者を通した学びや社会を通した学びが自己の学びにつながり、自分事として学ぶことが自己の生き方に影響を与える可能性が明らかにされた。キャリア教育のカリキュラム構成論の中心概念は学習者自身のキャリア発達であり、その目的は学習者が自分の将来をデザインすることにある。ただし、その際の手段は、直接に自己に向かうのではなく、他者と関わり、社会と関わり、それによって自己を見つめることにあることが、実践の分析と理論的考察によって導かれた。

以上の研究には、以下のような意義が認められる。

- ・キャリア教育の多様性を踏まえつつ、体系的にキャリア教育の全体構造を示した上で、一見するとキャリア教育との関連が少ないと思われる他者を通した学びと社会をとした学びに注目し、キャリア教育のカリキュラム構成論を導き出し、理論的・実践的な価値をもたらしている。

- ・キャリアという概念は、個人が自己の問題として捉えられるため、自己に直接に向かうキャリア教育や、インターンシップなどに注目が集まりやすい。そのような

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

中であって、注目されにくい課題に取り組み、他者や社会を通した学びが自分に返るという点に着目し分析と考察を深めた点に、本研究のオリジナリティがある。

・他者を通した学びがキャリア教育として位置づく上で、理論化が困難であるという課題に対し、教育学における、他者、ポストコロニアル、相互主体性などの議論を自身の研究の中に取り込み理論の柱とし、キャリア教育における相互行為をモデル化して示している点に、学術的な研究としての意義が認められる。

一方、審査委員からは、以下のような課題や疑問が提示された。

・3章と4章は、それぞれ他者、社会を介したキャリア教育について、実践の分析と理論の検討を行っており、パラレルな構造にはなっている。しかし、3章で展開されている他者を介したキャリア教育については、理論的考察について詳しく論じられているものの、実践の分析については相対的に少ない。一方、4章で展開されている社会の問題を介したキャリア教育については、実践の分析は詳細になされているものの、理論的考察は相対的に少ない。記述に濃淡があり、ややバランスに欠ける面がある。

・教師は教える立場と、キャリア教育として学習者が出会う他者という立場の二面性を用いるが、相互主体的な他者として教師について、理論的・実践的に考察を深めてほしい。

・多様なキャリア教育の機会を体系的に整理しているが、実習的活動と修養的活動の双方に、体験的な内容がふくまれており、その点の整理が今後の課題となるのではないか。

・本研究は日本を対象としてものであるが、日本の文化的な要因にどのように規定されているか。キャリア、自己、他者を相対化してとらえるためには、海外との比較の視点も必要となるのではないか。

・先行研究の多くが、心理学や社会学を背景としたものであるが、教育学としてのキャリア教育研究をどのように発展させられる可能性があるか。

このような指摘に対して、学位申請者は、研究の課題や限界を十分に認識しており、質疑に対する回答も、適切かつ妥当なものであった。

以上を総合的に判断すると、先行研究の検討と、実践事例の分析に基づき、キャリア教育のカリキュラム構成論を、他者との関わりと、社会との関わりに注目して明らかにしており、理論・実践の両面で学術的な貢献の高い研究と認められるため、審査員は全員一致して「可」と判定した。